
陽向（ひなた）の鼓動

ゆほ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陽向ひなたの鼓動

【Nコード】

N8775K

【作者名】

ゆほ

【あらすじ】

俺達には接点がなさ過ぎた。

クラスが一緒という以外には何も無い。

学校行事大好き「こっぴたいまなひと」の幸村真人好きになった女の子は……

「Project」の舞台となった光南高校のお話です。夏樹の姉が出てきます。

モノローグ

俺達には接点がなさ過ぎた。

クラスが一緒という以外には何も無い。

友達が違う。

興味が違う。

好きな食べ物が違う。

考え方が違う。

生き方が違う。

それでも、

心の内にどんな願いを持っているかを知りたいと思った。

姿が見えないときは何をし、何を思っているのか？

自分への想いはあるのか？

存在が視界に入ればそばに行きたいと思っ

た。近くにいると分かれば手をつないだり、寄り添ったりしたいと思っ

そして何より、心に背くことなく想い続けたいと願っていた。

昨日まで

俺の名前は幸村真人（こうむらまさひと）。

お袋は「真心人」って書く名前にしたかったらしいが、オヤジが当て字ってのを嫌がって「真人」ってなった。

その話を聞かされたのが中3の頃で、単身赴任していたオヤジが浮気したのしてないのと揉めていた最中にお袋が「あの人はお前から心を取った」などと言いだした。

その時は言われたこっちもどうしろって言っただって感じた。

結局オヤジの浮気が誤解とわかってお袋も俺の名付け話で文句を言ったことすら忘れてしまった。

俺の方もしばらくしたら忘れてしまった。

中3まではまるつきり女っ気がなかったが、高校に入学すると「彼女」が出来た。

最初の彼女は中学の同級生だった。ずっと俺に好意を持っていたらしく高校が別になったことで告白してきたらしい。

けれど彼女が同じ高校の先輩を好きになってしまい破局した。

次の「彼女」は俺が入った野球部部員のバイト仲間だった。

公立高校の野球部なんで甲子園なんて夢のまた夢だから、うちの野球部に入るようなのは、部活＋で高校生活を楽しんでるやつらのはかりだった。

夏休み中の練習のときにその子は他の友達と一緒に半分冷やかして練習を見に来てた。

冷やかされてるのはバイト仲間の部員だが練習の後その子達と一緒にファーストフードなんかに寄ることが増えて行った。

話し上手でいつも盛り上げてくれるところに好感を持った。

メアドなんか交換して夏休み中に二人で出掛けたりしていたら、夏休みあけに「彼女」になった。初体験も彼女だった。けれど9月末の体育祭からテストや文化祭と学校行事が続いていたら

「学校と彼女（わたし）どっちが大事」と怒鳴られた。

俺は根っからのお祭り人間だからイベント事は準備からしっかり参加したいタイプだ。

お互い自分の意見が譲れなくて喧嘩が続いて結局別れた。

しばらくフリーの日々が続いた。けれど友達とバカやって騒いだり、部活や学校の行事に張り切ったりとそれなりに楽しくやってた。

2年に進級したとき、去年同じクラスだった木田有子きだゆづこから告白され

た。1学期の期末試験前で部活が休みになっていたときに本人に呼び出された。

前回の失敗もあるから

「俺、部活とか行事とか張り切っちゃうけどいい？」

「うん、大丈夫。そういうところもいいなあって思ってたから」

ということできき合い始めた。

木田は簡単に言うと「気立っていいタイプ」だった。付き合いがスタートした頃にはちょうど夏休み入っていたから部活がない日にあっていた。

夏休みが終わる頃木田に「家に遊びに来ないか？」と誘われた。行ってみたら家族は外出中ということで、本当に誘われてしまった。

2学期になって体育祭の準備なんかが始まると木田と会う時間が減って行った。俺は体育祭実行委員会に入っていたからかなり忙しくなった。それでも木田は友達と過ごしたりして出来る限り、俺を待っていてくれた。

翌日は体育祭なので部活もなく久しぶりにゆっくり一緒に帰ることになった。木田は駅前からバス、俺は電車なので、駅前でお茶でもしようかとなった。

「明日の体育祭暑いかなあ」

俺達の通う光南高校の体育祭は何故か毎年9月末日と決まっている。

そのため残暑の厳しさが残っていると熱中症で倒れるヤツも出てくる。2年男子のメイン棒倒しのときなんかは天候、気温によっては放水があつたりする。

「うちのクラスはやる気のないヤツが多すぎて、特に女子！春の測定で結構いいタイム出したヤツがいたからリレーに出そうとしたら『めんどくさいからやだ』と断ってきたんだ。どう思う？クラスの勝利がかかっているのに」

木田は誰が悪いというわけでもなく、ニコニコ聞き役に徹していた。そうなると俺の男の愚痴が続く。

「あれは何事にもやる気がなさ過ぎる。それにクラスのやつらが妙に庇うんだよ。春に委員を決めるときに誰かが『杉下さんはこれから忙しくなるかもしれないから・・・』とか言い出して委員から省いたんだ。」

「杉下^{すぎした}さん？HLECCの？」

「何それ？」

残された気配

H L E Cとは

“ High school Life Enjoy Committe
e ”

訳すと

「 高校生活エンジョイ委員会 」

木田から聞かされた俺は「なんだそりゃ？」だった。

命名は生徒会長の塩尻^{しおじり}、俺とは中学も一緒だった。その生徒会長が個人的に後援しているらしいが、H L E Cに既定の段取りで依頼をすると、意中の相手に現在恋人がいるかどうかを調べてくれるらしい。

調べるというよりはうちのクラスの杉下冬寧^{すぎしたふゆね}が見るとそれが分かるらしい。

ウソだろ？って意見で俺の頭はいっぱいになった。

杉下といえばうちのクラスの中でも「やる気のないヤツ」の筆頭だ。そんなヤツが人を見ただけで彼氏・彼女がいるかないか分かるなんて信じられなかった。

で、依頼したヤツは「恋人がいない」って回答をもらうと自分にもチャンスがあるかもと考え告白を実行したりするらしい。

今後、杉下に依頼することがあるかもしれないと考えているクラス

のやつらは杉下を忙しくしないように委員から外したんだな。くそつ。

「本当は私もHLECに確認してからにしようって思ってたんだけど、グズグズ迷ってたから試験前になっちゃって、試験前に部活が休みになっているときは依頼しちゃいけない規定だから」

そこを逃すと夏休みになるし、と木田は続けた。

「そんなもんに頼んない方がいいことあるんだよ」

「・・・そうかもしれない」上目づかいに木田が言った。

残暑の厳しさは残ったままで、体育祭は予想以上に暑かったがそれなりに盛り上がっている。

委員の俺は招集係りだった。2年女子の綱引きにアイツが来ない。

杉下冬寧め！

「どうする？」同じ招集係りの女子が聞いてきた。集合は2つ前競技開始時と決まっているので、自分が出場する競技開始までの間に2つ別の競技が入る。だからまだ時間はある。

「ちょっと見てくる」

俺は集合場所になっていくグラウンドの入場ゲート脇からグラウンドを1周することにした。

入場ゲートの反対側、退場ゲートのそばに来たときに大きな声が聞こえた。

「女の子が倒れたぞ！」

「私先生か実行委員呼んで来る！」

「俺！実行委員です！」

そう言って近くに行ってみると長い髪を三つ編みしてさらに襟足のあたりでまとめている女子が倒れていた。
杉下冬寧だった。

「あの子HLECの子じゃない？」

「この暑い中チェックしてたのか？」

杉下の周囲を取り囲むヤツからの声が聞こえた。結構校内では有名なんだな。

断れよ。こんな暑くて居場所が固定されない日なんか。

とにかくこのままにしておくわけにはいかないから俺は杉下を抱き上げた。いわゆる「お姫様だっこ」だ。実行委員の腕章をしているから、杉下を抱きかかえていてもやましいわけではないと周りには分

かっている。

杉下を抱き上げた瞬間全身に衝撃が走った。

！！

クラスの中でも背の高い方に入る杉下は手足が長い。がっちりしているわけでもないが、華奢な感じでもなかった。だが抱き上げた杉下は予想以上に軽かった。そして俺の腕や体に触れる杉下の体というか肌は柔らかく、暑さで火照った顔はそれだけで何か扇情的なもので、俺は体の中が熱くなった。

その上シャンプーなのかとてつもなくいい匂いがして、俺は杉下からくるその匂いに頭がおかしくなりそうだった。

他の生徒に呼ばれた実行委員に綱引きに杉下が出られなかったことを招集係りに伝言してもらおう様に頼むと、俺は杉下を保健室に運ぶことにした。

杉下の匂いや感触におかしくなりそうながらも、とにかく俺は保健室を目指した。

心臓がここにあるんだと主張しているのか、ものすごい動きをしている。

息が荒くなってきた頃グラウンド側から入れるように窓が開けてある保健室に入った。

「先生！熱中症で一人倒れました。」

「空いているベッドに寝かして！」

数人いる怪我人を同時に治療している保健医が叫んだ。

保健医は俺の様子には全く気付かず治療を続けていた。俺は言われた通り保健室の奥の白いベッドに杉下を運んだ。

3つある保健室のベッドには誰もいなかった。靴が先に脱がせない
のでその部分だけ宙に浮かせるように少し斜めの体勢で寝かせよう
としたら、杉下の両腕が俺の首に巻きついた。

匂いがー！

胸がー！

杉下の息が俺の首筋にかかる。

やめろー！おかしくなる！

杉下は絡めた腕を解かないから、俺も一緒に倒れこむように杉下を
ベッドに寝かせた。

ドクン、ドクン

杉下が気がつくのではないかと思うほど、俺の心臓は激しく動いて
いた。

しばらくすると杉下の腕の力が緩んだ。

俺は杉下の首元の下にあった自分の腕を抜いて、杉下の靴を脱がせてから彼女の体勢を真っ直ぐに直しタオル地の毛布を体にかけて。

俺の体から杉下の気配が消えない・・・

結ばれない心

体育祭以来、俺は杉下冬寧ばかりを見ている。

HLECという活動は本当にしているらしく、体育祭で杉下が倒れた原因もやっぱりそれだった。一緒に活動している杉下の友人でうちのクラスの奥田亜紀おくたあきが塩尻に苦情を申し出て、「HLECは行事の日は活動しない」ことになった。

「くっだれねえことやってるよな。」

杉下に奥田、それと吉原香苗よしわらかなえの3人が何やら封筒を広げているのを見て俺は言った。

「何それ？自分は依頼できないから拗ねてるの？」

歯に衣着せぬ言い方で奥田が言う。杉下だけでなく奥田も、吉原も実はそんなに親しくない。ただ奥田は俺と同じ「お祭り人間」だから行事絡みで話すことが多い。

「なんで俺は依頼できないんだ」木田がいるからか？

「幸村は知らないんだ？塩尻くんが作った依頼書の書き方マニュアル。あれね、依頼主の個人名は記載しなくてもいいの。その代わりに封筒と依頼内容を書いた紙の両方に学籍番号を書いてもらってるんだ。」

光南には「生徒番号」と「学籍番号」ってのがあある。在学中頻繁に使用するの「生徒番号」の方。学年・組み・出席番号を組み合わせたものだ。例えば「1年1組出席番号1番」なら「10101」

となる。

一方の学籍番号は、入学した年度にその学年の生徒全員を誕生日順に番号付けをする。2008年度に入学して、その学年の中で誕生日が一番早ければ「08001」となる。

この学籍番号は卒業後、光南で卒業証明書なんかの書類をもらうときに必要になるらしい。後は生徒会なんかで個人情報进行管理するときに使用しているらしい。在学中はほとんど用がないから自分以外のヤツが何番かなんて大抵のヤツは知らない。

ところが俺の番号はそうじゃない。4月7日生まれの俺は光南の2年生の中で一番誕生日が早い。そしてそのことは春の自己紹介で話しているからクラスのほとんど知っているはずだ。

もし仮に俺がH L E Cに依頼をする際に学籍番号を書いても、奥田達に対しては名前を書いたのと一緒ということになる。確かに依頼はし辛いと考えるが普通だ。

「俺は依頼なんかしないぞ」

「必要ないもんねー。木田さんいるし」

奥田の言い方は何か引つかかりを感じたが、杉下の前で木田の名前を出して欲しくない俺が願っているせいだと思った。杉下を見たら何でもない風に俺と奥田のやりとりを見ていた。

って、良く見たら杉下の頭の後ろにクリップがくっついてた！しかもでかいやつ、洗濯バサミとかと同じバネの原理で出来ているクリップだ。なんて言っただけ？

「杉下、お前頭にてっかいクリップくっついてるぞ」

俺が言ったことに杉下ではなく奥田が反応した。

「やだあ、冬寧またそれで髪止めてるの？変な跡つくからやめなよっついてるじゃん」

「んー、今朝髪邪魔なっと思ってた時これが目の前にあっただよね髪が邪魔だと思ったのは一体どこでだ？

どうやら顔にかかる髪を後ろでまとめてクリップで留めていたらしい。

奥田がちよくちよく注意しているらしいが杉下は一向に気にしてない様子で、そのクリップ外した。

その動作が何故か体育祭の杉下を思い出せて俺はまた体の中が熱くなってくる感じがした。

「幸村の彼女はこういうことしなそうだもんね。」

奥田は何故か木田の存在を出してくる。俺は苦しかった。これ以上奥田に木田ことを話して欲しくなくて席に戻った。それから俺は木田の携帯にメールを送った。

「最近会えなかったら、メールでも良かったんだけど修学旅行の話しがしたなあっと思ってたの、連絡貰えて良かった。」

学校じゃない方がいいと思った俺は駅から少し歩いたところにある公園に誘った。遊具が少ない公園だから、子供もそんなにいない。

小学生が2人滑り台で遊んでいるくらいだ。

俺たちは隅にあるベンチに座っていた。俺は昇降口で木田と合流してからほとんど話していない。

木田とはクラスが違うから、修学旅行の最終日、自由行動の時に一緒に過ごそうと話していた。

でも、それはもうできないと思った。

「木田、悪いんだけど、もう付き合えない」

「えっ？・・・どお、して？」

「他に好きな人ができた」

そっだ、俺は杉下冬寧が好きなんだ。

結ばれない心（後書き）

作中、冬寧が髪に止めていたクリップは「目玉クリップ」というものです。

作者が学生の頃時々やってました。

願い事

杉下が好きになったと分かったとき、木田とはもう付き合えないと思っただ。

他に好きなヤツができて、今付き合ってるヤツと付き合い続ける。時々そういうヤツもいるかもしれないが、今日みたいに何も知らない奥田が突っかかって来るだけでも俺にはできないと思っただ。

修学旅行の自由行動は結局一人で行動することになった。同じ班のメンバーには最初から「別行動で」と言っていたのでそれを変更しなかった。あいつらは多分俺が木田と落ち合っていると思っている。

一人でぶらぶらと過ごした。偶然でもいいから杉下に会えたらいいなあと思っただが、奥田や吉原と一緒にたろうから誘うことは不可能だろう。

木田と別れたばかりで杉下と歩いているのを見られたらそれはそれで杉下が色々言われそうだし、それでも今杉下が何やってんのかとかそんなことばかり考えていた。

目的を持って歩いてなかったくせに気がつくとも目の前に奥田と吉原は歩いているのが見えた。

杉下はどこだ？俺は二人に近づいた。

「・・・幸村みたいなのは絶対駄目だなあ」

距離が縮んだところで聞こえたのは奥田が俺をダメだしする声だっ

た。

「クラス委員の西村とかがいいと思うんだけど、香苗はどお思う？」

「往来で人のこと何ダメだししてんだよ！」

俺の声に二人がびっくりした顔で振り向いた。

「幸村をダメだししてるんじゃないの。幸村みたいなタイプがダメって言ってるの」

「同じことだろ。ところで杉下は一緒じゃないのか？」辺りを見回したが杉下の姿がない。

「冬寧ね、今ものすごく利益があるっていう『縁結び寺』にお参りにいってるの」

縁結び！？誰との縁を結ぶ気だ？吉原の発言に内心物凄く動揺しているが、出来る限り平静を装った。

「ものすごく利益があるのに二人は一緒に行かなかったのか？」

「だって冬寧、私にも亜紀にも『縁結び寺』って言わないで、一人で行きたいところがあるから別行動したいって言うだけだったんだもん。」

「杉下が言わないのに『縁結び寺』に行ったってなんで知ってるんだ？」

「冬寧ってさあ、ガイドブック見るときいつもそのお寺の地図が乗

ってるページしか見てないから」
吉原がクスクス思い出し笑いをしながら答えた。俺は笑えねーと思
った。

「置いてきぼり食って俺のダメ出しかよ」

「違うよ、冬寧の好きな人ってどんな人だろうねって考えてたら、
亜紀が幸村くんタイプじゃないだろうって言い出して」

なんでだよっ！

「そんで、西村？」冷静に、冷静に。

「今のところ私のお勧めは西村だね。冬寧にはあぁいう配慮のきく
タイプがいいと思うんだ」

俺は配慮がきかないタイプなのか？

「ところで幸村なんで一人なの？木田さんは？」

「あー、別れた」

「えっー！？なんで？」

「……俺の事情……」

信号のところでは俺は二人とは別の道へ進んだ。杉下が縁を結びたい
相手はどんなヤツなのかで頭の中がいつぱいだった。

適当に昼を食べて、それでも行きたいところが思いつかないから、集合場所になってる駅に来た。新幹線が止まるだけあって駅は広かった。集合場所の広場を確認してから、でっかい売店で、家への土産を買った。レジの横に「抹茶味・キャラメル」なんてのがあり、キャラメル好きの俺はどんな味が試してみたくてそれも買った。

早速「抹茶・キャラメル」を食べてみた。まあ抹茶とキャラメルの味だった。

杉下は縁を結びたいヤツ、要は好きなヤツに土産を買ったりしたの
だろうか？いやそもそも杉下が好きになったヤツで誰なんだろうか
??

あつ、そっか

だからみんなHLECに、杉下に依頼するんだ。

杉下に分かるのは付き合っているヤツがいるかどうからしいが、そ
れでも好きになったヤツが自分の方を向いてくれる可能性が有るの
か無いのか知りたいんだ。

俺も知りたい。

杉下が俺の方を向いてくれるのかどうか、杉下の目には俺はどんな
風に映っているのか。

瞳に映る

俺にしては珍しく、物思いに耽ってしまった。

気がつけば集合場所の広場には光南の2年生がちらほら。

奥田と吉原も戻ってきた。しかも相当買い込んだらしく二人の荷物はさつき会った時より増えていた。

杉下が来ない。体育祭の時のこともあるから少し、いやかなり気になった。

奥田が携帯を取り出して話し始めた。

もしかして杉下からかなと思いつながらぼんやりと眺めていた。

「えー場所が分からない!？」

!!!!!!!!!!

いきなり大声を出した奥田に視線が集まった。

まさかと思って俺は奥田に声をかけた。

「どおした？」

「冬寧が、」

やっぱり!

「駅には着いてるらしいんだけど同じところグルグル回っちゃってるみたいで、・・・」

「ちょっと代わって」

俺は奥田の携帯を持った。

「もしもし今そこに何が見える？」

「んー、抹茶キャラメル発売中」

あそこか？さっき俺がキャラメル買った売店のそばなら距離はあるが階段登って真っ直ぐ行くだけだぞ。

「今から行くからそこ動くなよ」

俺は携帯を切ると自分の番号に発信した。

胸ポケットに入れてた自分携帯から着信音が聞こえてから奥田の携帯の発信を切って奥田に返し、自分の携帯を出した。

「念のため杉下の番号聞いておいてもいい？」

「冬寧携帯持ってないから」

そうなのか？

あいつ動いたりしなければいいが。

「とにかく探してくるわ先生きたらてきとー言っておいて」

「う、うんよろしく」

奥田が心配そうに言ってきた。

時間はまだあるが当たりをつけた場所とは違っていたらまずいから俺は広場を走り出した。

予想した通り階段を降りきった売店そばの公衆電話の端に杉下はぼんやりと立っていた。

「杉下！」

「あっ」

急に声をかけたせいかもものすごく驚いた顔で杉下は俺を見た。

杉下は驚いた顔から何故か不思議そうな表情に変わりじつと俺を見ている。

俺の心臓が激しく動き出した。

「ここからなら階段登って真っ直ぐだぞ」

「なんか人の流れに逆らえなくて」

真っ直ぐ行くだけなのに何故？

「あのさ、時間なくてお昼食べてないからチョコ買いたい。売店行

「ってもいい？」

「キャラメルなら持つてるぞ」

「・・・キャラメル苦いからいらない」

「あーそうかい」

「分かった、買ってこい」

こくと頷くと杉下はさっき俺が寄った売店で定番のチョコレートを買っていた。

好きなのだろうか手に持ったチョコを嬉しそうに眺めてた。

「行くぞ」

あえて意図的にそうしたわけじゃなかったが俺は杉下の手をつないで進んでいた。

「欲しいものは手に入ったのか？」

杉下が急に立ち止まった。

手をつないでいた俺も当然前には進めずどうしたものかと振り返り杉下を見た。

「うん」

その返事に俺の胸ものズキンと何かが突き刺さった。

杉下がじっと俺を見ている。

「ものすごく御利益がある！」吉原の言葉が頭の中をかすめる。

なんでもないような風を装って俺は再び杉下に背を向けて足早に進んだ。

俺の胸はキリリと痛んでいた。

発言

今この教室にいる担任を含めた全員は一種異様な雰囲気にも包まれていた。

それはまるで

「我が子の授業参観に出席し「えっ、その問題はお前答えられないんじゃないの？」という問題に我が子が手をあげてしまい、挙句さされている。大丈夫か？答えられるか？と我が子を見守る自分がいる。」

そんな既視感^{デジツマユル}

どうしてそうなったかという教室では今文化祭のクラスの出し物について話し合っている。

修学旅行の学習レポートの発表が2年のお決まりだがどういう形で発表するかを話し合っていた。そして教室に迷路を作ってその通路に掲示しようという案が出たところだった。

「他に意見のある人」という文化祭実行委員の声にすぐさま「はい」と右手をまっすぐあげたヤツが一人だけいた。

クラスの誰もが担任もそいつが自分から挙手するなんて考えてなかったから、一瞬どよめいた。

そいつの名は、杉下冬寧。

教壇に立つ実行委員は杉下の他に手をあげてるヤツがいなかったの
で多少引きつりながらも杉下をさした。

クラス全員が今文化祭のクラスの出し物について話し合っているこ
とを忘れかけていた。

「迷路」

それはさっき出た意見だろっ！

「をもっとシンプルにしておいて入り口で5問くらいクイズが書い
てある紙を渡すの。」

なんとかラリーみたいに全問正解したら出口で景品を渡す。

問題は迷路の順路通りにはしなくて少し動きがでるようになっている
の。

景品は制服の胸ポケットに入るくらいの袋で可愛くりボンでラッピ
ングしておいて端に2ー4で書いておいて『あの可愛い何だろう
？2ー4に行ってみよう』ってなれば宣伝しなくていいし。

あおりは『試験に出る』とかにすれば3年生とかも来てくれるんじゃないかなあ」

半ば棒読みの後半はゆる〜い感じに杉下は発言した。自発的な発言としてはおそらく今年度最初で最後だろう。

「冬寧！」

『私のお母さん』とでも書いた作文を読み終えた我が子に喝采を送っている母のような奥田の声が聞こえた。

なんで文化祭の出し物如きでクラスが白熱するかというと、賞金が出るからだ。

生徒会の企画で人気投票をやって1位2位3位に入ったクラスや団体には金一封が授与される。

うちのクラスではそれをクリスマス前に企画している「クラスレク」の資金にしようと考えている。

「クラスレク」ってのはこれまた光南のイベントでいわゆるクラスの親睦会になる。クラスレクのために学校の施設を貸してもらえる。

例えば体育館で球技大会やったり、視聴覚教室で映画見たり、以前夏休みに校庭で花火大会やったクラスもある。年度内に1回、時期はいつでもいいがうちのクラスはクリスマスに教室を借りて飲み食いしながらなんかやるうという予定だ。

まあクリスマスドンピシャだと都合の悪いやつが多いから22日に放課後教室をクリスマスっぽく飾って、と大まかなところまでは決

まっている。

ちなみにクラスレクの実行委員は俺だ。体育祭終わって野球部もそんなに厳しくないからな。

予算はクラスで自己負担。準備から後片付けまでをクラスで責任持つてやるという以外ほとんど放任の行事だ。

で、その自己負担（要は割り勘）を減らすべく文化祭の人気投票でひと稼ぎしようと知恵を出し合っていたのだ。

言い方はどおあれ杉下の案は概ね好評で杉下案を軸にクラスの出し物が決まった。

リボン

2年生ともなると部活でも役職についている奴もいるし、部の中心になっていくものだから、文化祭のクラスの方はなんとなく参加でいたいと思うらしい。

まあ俺は例外だが、野球部の方は出店で焼きそばか何かを売ろうという話しになっていて、あっちこっちバタバタやっている。

クラスの方は作業の分担もほぼ決まった。俺は内装と掲示の担当で、文化祭前日に作業する予定だ。

景品に関しての案を杉下がどうしてもアレで行きたいと譲らなかつたので、杉下をリーダーにして何人かが担当することになった。もちろんその中には奥田も吉原もいるから心配はないだろう。

文化祭まで後2日という放課後野球部の焼きそばの打ち合わせを終えて教室に戻ったら、杉下達景品担当が集まって、景品作りをしていた。

小さなビニールの袋に、個別包装された飴玉を入れてリボンで口を閉じる作業だ。

作業は進んだらしく杉下と奥田を除いた他は部活へ行くと教室を出て行った。

杉下と奥田は二人で作業を続けるようだ。

「まだやるのか？」

「明日は飾り付けで教室では作業できそうもないからね。数だけこなしておこうかなって」

答えたのは奥田、杉下は作業に集中してこっちを見ない。今日はどこで手に入れたのかピンクのモールで髪を結っている・・・どうにもな・・・

ラッピングされた景品を見ると色々な種類の飴やキャラメルが入っている。

奥田の携帯が鳴りだした。

「もしもし・・・えっ?・・・あつ、忘れてた。うん・・・すぐ帰るわ」

通話を終えた奥田が杉下の方を見た。

「どおしたの?」

「冬寧、今日イケメン家庭教師が来る日だったの忘れてたあ。ごめん、帰るわ」

奥田は慌てて帰り支度を始めた。

「イケメンてお前勉強する気あるのか?」

「だって、家庭教師センターに依頼してるのよ。みんな頭良くて同じ金額ならイケメン指定でいいじゃない?」

やる気があるんだかないんだか・・・

「じゃね。冬寧も、もう終わりにしてもいいからね。明日早めに来るからさ」

「じゃあもう少しやったら帰るね。」

奥田は教室を飛び出て行った。二人つきりになってしまった。

俺は黙って杉下の作業を見ていた。教室の外はかなり暗くなっていた。

「お前確か徒歩だったよな。一人で大丈夫か？」

「うーん、ハルトに迎えにきてもらうかな？」

ハルトって誰だ？送ってやるつもりで聞いたのに爆弾が投下されたみたいになった。

「幸村、携帯借りてもいい？」

「ああ」

杉下はかばんの中から生徒手帳を取り出し、めくったページを見ながら俺の携帯から電話をかけたがすぐに切った。

「幸村もう帰る？」

「いや、まだ大丈夫だ。」

「しばらくしたら電話くるかもしれないからその時また貸して」

確かにそのやり方ならこっちに通話料はかからない。

杉下はまた作業に没頭しだした。俺は飴を袋に入れる作業を手伝うことにした。それを杉下に手渡すと杉下はリボン成形よく結んでいった。

「お前なんでリレーの選手断つたんだ」

沈黙が嫌で俺は当たり障りのなさそうな質問をした。杉下は作業の手を止めて思い返しているような表情をした。

「バトン、上手く取れない気がして、それにカーブとか転びそうだし、誰もいないところを真っ直ぐ走るのはいいけど、リレーみたいにごちゃごちゃしたところを走るのはあんまり、」

ああ〜そういうこと。リレーがごちゃごちゃって。

俺の携帯が鳴った。見たことない番号だったので多分ハルトからだろうと思ひ杉下に渡した。

「もしもし、ハルト?・・・まだ学校。・・・そっか・・・あつ、これ?クラスの男子の携帯。・・・うん」

クラスの男子・・・結構きついな・・・

「幸村、ありがとう」

携帯を返す時一瞬杉下の手が触れた。体育祭の時の杉下の感触を思い出して体が瞬間熱くなる。

杉下の方は作業を開始していた。俺は熱が冷めるのを待つように杉下の作業を見ていた。

「んー、今日はもついいかな？」

体を伸ばして杉下が作業終了宣言をした。時計を見ると7時過ぎていた。

「この子が一番可愛く出来た。」

最後に作ったキャラメルが入った景品を他の景品と一緒に置くときに杉下は呟いた。

飴やラッピングの材料を一つの箱に入れて片付ける。杉下がその箱を教室の後ろへと運びに行った。

俺は杉下が最後に置いた景品を取り上げてコートのポケットに入っていた。

「じゃあうちこっちだから」

この寒いのに手袋もしないで杉下は自分が帰る道を指差した。

学校から駅前まで一緒に歩いた。お互いが盛り上がるような共通の話題もなく、杉下の家が徒歩で15分くらいだということが分かっ

ただけだった。

「気をつけてな」

少しずつ小さくなっていく杉下を見送り続けた。

友達とも言ってもらえない、ただクラスが一緒なだけ、「送る」と言っても良かったのだろうか？

そうしたら少しは杉下に近づけたのだろうか？

コートのポケットから取り出した「一番可愛い」ヤツを俺は握りしめていた。

心、発見

「えーっ！ウソでしょ??」

教室中に響き渡る奥田の叫び声、窓際の杉下の席を取り囲むように座っていた奥田と吉原は教室後方に座る俺の方へ振り返ってマジマジと見た。

「なんだ？」

「なんでもないわ」奥田が目を合わせず体の向きを戻した。吉原も苦笑いを向けて目を反らした。

本当になんだ？

文化祭の出し物の人気投票は惜しくも2位だったが、賞金が出たのでそれも合わせてクラスで飲み食いすることになった。

ピザ屋でバイトしているヤツや酒屋でバイトしているヤツがバイト先が融通をきかしてくれると言い出したので、ジュースやピザを頼むことになった。

ただ飲み食いするだけじゃクラスレクとして意味がないので、何か企画を立てようということになった。

「それじゃあ企画は『クリスマスにちなんだ思い出』もしくは『告白』ということで、最後に投票で一番いい話しをした人に商品を出す。これでクラスに告知していいかな？」

クラス委員の西村がまとめる。

クラスレクの係りは俺を含めて7人、杉下達3人もいる。

HLECだか何だか知らないが委員会に入っていないからということ
で誘った。

そうしたら奥田が西村にも声をかけてきた。後は俺と同じ野球部の
ヤツと手芸部のヤツ。

「クラス中が集まってる中で告白ってする人いるかな？」

「まあどつちでもいいんじゃない？この際だからってクラスの企画
に乗っちゃうのも勢いがついていいんじゃないかな」

奥田の疑問に吉原がやんわりまとめる。

「一応お断りされた人とお断りした人が気まづくならないように努
めることはクラス協定として徹底しましょう」

西村も告白企画がクラスに受け入れられようにクラス協定を立案し
ていた。

「あくでもクリスマスの思い出って何話したらいいんだろう？」

奥田が体を伸ばしながら言った。

「クリスマス……」

杉下が難しい顔で呟いた。まさか面倒だとか言い出さないよな。

「あつ冬寧は名前の話ししたら！」

奥田が杉下に提案した。

「名前って？」

クリスマスに名前ってどういうことだ？

「冬寧って24日が誕生日なの、ね。で、名をつけてもらった時の話がすごくいいからさ」

「どづいつ由来で付けられたんだ？」

「今ここで話しちゃったらダメじゃん」

「でもここにいる奴らは所謂幹事だから当日ゆっくり聞けないかもしれないじゃん」

押さえておきたい杉下基本情報、あんまり食い付きがいいと他の奴らに感づかれるんじゃないかとちょっと焦ったが、他の奴らも興味があるらしい。

「私も聞きた〜い」

「僕も」

全員が杉下を見た。杉下は教室を見回して黒板のところへ行った。

「・・・あのね。冬って寒いじゃない」

そう言つて「冬」って書いて丸で囲んだ。その上にもう一つ丸を描いて、雪だるまを描いた。

「でも、家の中って暖かいじゃない。」

今度は雪だるまの隣りに三角と四角を描いた。「家」なんだろう。

「家の中にいれば体も温まるけど、私が生まれたら心も温かいだろうなあってお父さんが言ったの」

四角の中に窓を表す四角を描いてその上にハートを描いた。

!!!!!!

ハート

心

俺は突然思い出した。昔母親が父親のことを怒ったとき「俺の心を取った」とか言っていたことを。

俺は杉下が黒板に描いた絵から目が離せなくなった。

その後レクの打ち合わせで何を話したか全く頭に入っていないかった。

気付けば残っていた全員が昇降口で靴を履き替えているところだった。

「あつ黑板消してくるの忘れた」

杉下が自分の描いた絵を消し忘れていたらしい。

「やだ冬寧、ネタばれになっちゃうじゃない」

「俺消してくるわ。みんな先に帰っちゃっていいぞ」

俺は教室へ駆け上がった。

真っ暗な教室の電気をつけるとそこにはさっき杉下が描いた絵がそのままになっていた。

俺は家の絵の隣に「真人」と縦に書いた。

それから杉下が描いたハートを丸で囲みそこから「真」と「人」の間まで矢印を描いた。

「ここにあるじゃねえか・・・」

「真人人」

俺の名前が元に戻った。

杉下は俺が失くしたものを持っていたんだ。

心、告白する

クラスレクの告白って完全に自分用だよな。

「ハルト」が誰だか分からないが、俺はクラスレクの企画を利用して杉下に告白しようと決心した。

ちなみにクラスレクはクラスの親睦会だから担任も参加するが、個人的に呼び出すことも考えたが奥田がうるさそうなので、構っちゃられない。

廊下を歩いていた俺を呼びとめたのは中学からの同級生、生徒会長の塩尻だった。

「何だ塩尻？」

「つかぬこと聞きたいが、お前2組の木田有子と別れてから誰とも付き合っていないのか？」

「ああ、それが」

「なら今は誰とも付き合っていないってことだよな」

「悪いか」

「いいや単なる確認だから」

「確認て？」

「HLECに幸村のことが依頼であつたらしい。奥田さんから裏付けが欲しいって言われて」

「はあ、まだやってんのか？それに杉下が分かるんじゃないのか？」

「まあそうですが、今回に限って何故か裏付けを頼まれて、それにしても彼女はすごいですよ。HLECを発足してから正解率100%ですからね。」

「マジかよ……」

「というわけで裏付けいらない気はしますが、頼まれたので一応。それにここだけの話し複数と付き合っているかどうかも分かるらしいですよ。まあこれはサンプルが1件しかないそうですが」

「どうでもいいわそんなこと。」

「良かったですね。近いうちに告白されるかもしれないですよ。」

「そう言って立ち去っていった。」

塩尻はうちのクラスの西村と話し方は似ているが内容が無遠慮で時々ムカつく。塩尻と話した後だと、「配慮がある」と西村のことを以前奥田が評していたことが納得できる。

「あっ修学旅行で俺のことダメだししていたことを思い出してしまった。」

そうこうしている内に期末が終わり、クラスレク当日となった。

少しはクリスマスっぽくなるようにと教室内を飾りつけたりしたが、家にあつたからとクリスマスツリーを持ってきたヤツがいたからかなり雰囲気は出てきた。

レクの係りの代表が一応俺になっていたので、企画のトリは俺になつてしまった。

要は時間が押したらそこで調整つてことだ。

時間調整で告白つてやだなあと思ったが俺が告白を予定していることは誰も知らないから仕方がない。

ちなみに杉下は3番目、もうすぐだ。

「じゃあ次は杉下さん」

進行係りの西村が教壇へ行くように指示した。

さすがに今日は杉下も頭にヘンなクリップはつけていない、奥田達と100円ショップで購入したサンタの帽子をかぶっている。

軽いウェーブがかかった髪に合っていて、「ううっ可愛いじゃないか」と顔には出さないようににやけていた。

「私は……」

杉下が生まれた時の話をするのは分かっていたが、それでもちゃん

と聞きたいと思った。

なかなか杉下は話し始めない。

どうした？奥田の提案を忘れたか？

杉下が俺を見た。

まだ見てる。

じっと見てる。

どうしてだ？

「冬寧、話し話し」

奥田が催促してきた。

杉下は一瞬奥田を見たがまた俺を見た。

「……幸村真人が好き……」

ハッピー × ×

クラス中が凍りついた。担任も凍りついた。俺も凍った。

クリスマスの雰囲気で盛り上がっていた教室が一瞬にして静まり返った。

嘘だろ！なんでだ？

心臓がバクバクして頭の中がパニックになったが、杉下に伝えるのは今だと思い「俺もだ！」と言おうとしたその時、

沈黙を引き裂くように奥田が叫んだ。

「どういことよ！冬寧は自分の名前の話しをするんじゃないの？っていうかなんで幸村なのよー！」
あっちも俺以上にパニック状態だった。

「……だって断られても普通にしようって、クラス協定があるし……呼び出さなくてもいるから。」

この場で告白する決意をした杉下の動機について、いかにも杉下らしいとクラス全員納得した。

「まつ、じゃあみんなも杉下の勇氣に敬意を表して、失恋したことは触れてやらずに今後も仲良くやっていってくれ」
担任がまともに入った。

「ほんと杉下さん頑張ったよ。」

「偉かったよ。」

クラス中から杉下は激励された。断られても良く頑張ったと。

「……なんでお前ら俺が断ると思ってんの。っていつかまだ何も返事してないんだけど」

怒りに震えるような声で俺は発言した。

「だって無理でしょ？冬寧と付き合っつの」「奥田がきっぱりと言いきったが、俺は返事をしなかった。

「……ちよつと行くぞ。」

その代わりに杉下のところまで行き、杉下の腕をつかんで教室のドアの方へ向かった。

「どこ行くんだよ？」「西村がレクはどうなる？という意味で声をかけて来た。

「ここで返事するって協定はないだろう。」

『えっ、それは断らないということか？』というような表情で今の教室の中にいる全員（担任も含む）が俺達を見た。

杉下は自分の状況がさっぱり分からないようにきょとんとしている。

「10分で戻ってこいよ」担任がエールを送るように言った。

俺に引つ張られながら後ろを振り返った杉下は奥田の方を見たが、放心状態だった。

俺は杉下の手を握って、俺達の教室のある西校舎の階段を登って行った。

最上階は屋上に出る扉のあるスペースで、扉の他にあるのは掃除用具入れくらいだ。

寒かったが、まだ校舎に残っている生徒もかなりいるから、ここま
で来ないとゆっくり話が出来ないと思った。

杉下の手を掴んだまま向かい合わせに立った俺は杉下に問いかけた。

「ハルトって誰？」

「兄」

そうきたかあ。

やっぱり俺には杉下の基本情報が少なすぎる。

「修学旅行の時の縁結び寺で何祈願したの？」

「言つと叶わないかもしれないから言わない」

杉下は俺の目をそむけて言った。

「・・・俺のこと？」

杉下は俺を見ながら頷いた。良かったあ。

「俺も杉下のこと好きなんだ」

すごく意外そうに目を丸くして引いている。

「そこ、喜ぶとこじゃないか？」

「ああ、そうだね、うん」

何かを見つけたように杉下は嬉しそうな顔になったが、不思議そうな表情に変わり首をかしげて聞いてきた。

「ほんとに？」

うっ、可愛い・・・

「ムズ」

杉下がじつと俺を見てる、ちょっと熱っぽい瞳だ。またドキドキしてきた。

これってキスとかしてもいいのか？と思いながら両手を少し広げてみた。

杉下が俺の体に飛び込んできた。

うわあ

背中に両手を回されしっかりと抱きついてきた。心臓の辺りに杉下の頬が当たっている。

「……陽向ひなたの匂いだ」

杉下が呟いた。

「へ？」

何を言っているかと思ったが、俺も杉下の背中に両手を置いた。

しばらく抱き合っていたら急に杉下が崩れ落ちるように体重をかけたきた。

「おいっどうした？」

軽くゆすったら膝を床につけた体勢になり少し仰向けになった杉下が細く脛を開いた。

「眠い・・・緊張して、夕べ寝てなかったから・・・」

杉下はそのまま寝てしまった。

俺も床に膝をつき杉下の顔が俺の肩に乗る状態で抱えていた。

「どうすりゃいいんだ？」

俺の携帯が鳴った。

杉下を抱えながら携帯をブレザーのポケットから出すと奥田からだった。

「もしもし」

「幸村！何やってんの？もう20分も過ぎているわよ」

「寝てるんだけどさ、どうしたらいい？」

「はあ？」

思考錯誤の末、一瞬杉下には起きてもらい、その間に杉下を背負い教室へ戻った。

ドアを開けるとクラス中がにやけて俺達を見た。

「幸村の番なんだけどどうする？」西村が聞いていた。

「付き合うことになるから宜しくー！」

明日の祝日は杉下の誕生日プレゼントを買いに行こう。

ハッピー××(後書き)

一応「片想い編」終了です。

「試練の両想い編」を構想中ですが、ゆっくり更新します。

初期構想にあったエンディングまで自己満足スタンスで頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8775k/>

陽向（ひなた）の鼓動

2010年10月14日13時40分発行